余白から新たな時間を創出する人

五十嵐幸雄　備忘録集Ⅲ
『ビジネスマンの余白』に寄せて

鈴木比佐雄

1

五十嵐幸雄さんは、時間を有効に使う達人だ。週末には特別なことがない限り地元の図書館で調べ物をしたり、気の向くままにエッセイを書き続けることが、五十嵐さんの日課になっているという。その成果として二〇〇一年に『小鳥のように遊ぶ』と二〇〇六年に『忙中自ずから閑あり』の二冊のエッセイ集（備忘録ノート集という副題）がすでに刊行され、今回のエッセイ集はその後五年間に書かれたものを纏めた三冊目の本だ。創業一〇〇年を超す「三和テッキ」という老舗の架線メーカーの現役会長で多忙なビジネスマンだが、五十嵐さんは一日の時間の中に美しいものを発見したり、感動的なことを感じたりする質的時間を見出しているのだろう。時に私にも時間を割いてくれて赤提灯で酒を酌み交わすこともある。その酒席で「戦闘的に働き、小鳥のように遊ぶ」ことをモットーにしていると何度もお聞きしている。五十嵐さんとは前のエッセイ集を出した頃に、詩人の山本十四尾さんから紹介された。山本さんは以前同じ会社の総務部長を勤めていて、当時五十嵐さんは山本さんの部下だったそうで、山本さんによると会社の中には山本さんを含めて三人の詩人がいたという。そのころから企業文化の中に詩文・エッセイなどの文章を書く社員を尊重する良き伝統がこの企業にあったということは驚くべきことだ。因みに当時の社長の芦沢新二社長は、『伊勢物語』の研究家であり『伊勢物語』の多岐に渡る写本や版本など貴重な資料一〇〇〇点を蒐集していた。亡くなられた後も故人の遺志をついで奥様の美佐子さんが、その蒐集された写本類を学者、研究者、伊勢物語ファンのために「鉄心斎文庫伊勢物語文華館」で定期的にテーマを決めて公開している。私も『伊勢物語』の「東下り」に出てくる都鳥が泳ぐ隅田川の傍で育ったこともあり、山本十四尾さんから誘われ、山本さんの主宰している詩誌「衣」のメンバーと一緒に何度か訪ねたこともある。一企業の経営者が日本文学の古典の貴重な文化財を私財を投じて収集し、それを専有することもなく、多くの人々に公開するという、芦沢さん夫婦の変わらぬ情熱に行く度に心打たれる。文化の伝統を引き継ぐことを実践したことは、その精神が山本さんや五十嵐さんにも脈々と生き継がれていることがわかるのだ。

私はコールサック社を始める前に広告会社にいて、会社案内などの製作に携わっていたこともあり、一流企業の経営企画室には、短期の経営的なことを考えるだけでなく、会社と社会との新たな関係や会社の長期的なビジョンを創造しようとする俊英たちがいることを知っている。経営的なことだけでなく文化的な知識も豊富でライター顔負けの文才を持っている人材も中にはいた。一流企業の経営者や幹部たちは、多くはその業界のスペシャリストであり、その分野の収益を上げる天才たちであることは間違いなかった。しかし専門の仕事を離れ文化・芸術・思想・哲学などを自分の言葉で話ができる経営者とは、ほとんど会ったことはなく、幅広い人間的な魅力に欠けているように私には感じられた。私はこのことは日本の企業が世界的になっていく際に、世界の国々の多様な文化を尊重する上で最大のネックになるだろうと感じていた。そんな経営者たちを補っているのが経営企画室

の俊英たちだったのかもしれない。五十嵐さんも若い頃から将来の会社を担う人材として経営企画室的な仕事に就かされて、当時の芦沢社長から文章を定期的に書くことを勧められたらしい。そのことを継続して五十嵐さんは淡々と数十年実践してきた結果がこのようなエッセイ集に結実していった。五十嵐さんを見ていると経営企画室の俊英が幾多の試練を経て、いつしか社長に推されて、今は会長になっていたという理想的な人事がされたように思われる。

2

本書を読めば、五十嵐さんがいかに時間を有効に使用しているかがわかる。その時間とは仕事に流されていく時間ではなく、仕事を集中的にやりとげたら、その瞬間に仕事を離れて、文化的な芸術作品に触れてその余白の時間に身をあずけていくことなのだ。美術館や博物館や映画など身近なところで開かれている場所に目的もなしに顔を出す。日常の仕事の頭脳を白紙にして、文化・芸術や異なる分野の世界にまっさらな気持ちで没入しようとする。ビジネスの価値から文化の価値へと瞬間的にスイッチの切り替えを五十嵐さんの頭脳は自然と行う。そのスムーズな切り替えは多くのビジネスマンにとって真に役に立つ知恵となるのではないか。

人びとが作り上げてきた文化・芸術などと幸福な出合いを自然体で行う瞬間が、本書には随所に記されている。本書の特徴を少し紹介したい。第一章「ビジネスマンの余白」では二十二編が納められている。冒頭「師走の美術鑑賞」は、二〇〇六年の暮れの忘年会の後に上野の東京都美術館に行き「大エルミタージュ美術館展」で世界の名画に触れながら、ゴーギャンなどの画家の足跡に思いをはせる。五十嵐さんが一年間の仕事を納め、静かに名画と語り合う姿勢は、

とても清々しい。その美術館めぐりのエッセイでは、国立新美術館、脇田美術館、横浜美術館などで一期一会の作品との幸福な出合いをしている。またベートーヴェンの伝記映画、鎌倉妙本寺、徒然草などに歴史上の人物との語らいや問いかけを聞いているようで、数百年から千年単位の時間を現代に生かす視点が重要だと思われた。また現代の車内での若い女性の化粧風景、東京国際女子マラソン、百円ショップ事情など現代の世相を暖かく見守る視点、野鳥などの地域の環境からや地球規模の環境問題などにも果敢に考察を深めている。

二章「ビジネス界の精神風土」は、五十嵐さんの日常的な仕事を通して考えてきた十八編が収められている。この章の中心テーマは、企業倫理や職場のリーダーの心構えなどについて語られている。五十嵐さんは四十年間のビジネスマンの経験と古典の中で現代に生かせる倫理観を融合させて、現在の企業が収益中心に行動した結果、企業がどれほど社会的に信用を失い、結果として企業価値を下げて収益を損なったかを冷静に分析している。そして最も大事なことは、法令順守というコンプライアンスの浸透と徹底を図る、社是や経営理念という経営トップの哲学を社員に示し、それを現実化していく企業文化を育てていくことの重要性を語っている。そして五十嵐さんは、企業風土にも必要で応用が可能な孔子の「五常の徳」（仁、義、礼、智、信）や新渡戸稲造の武士道の「七つの徳」（義、勇、仁、礼、誠、名誉、忠義）などの倫理観が企業文化にも必要であることを力説している。企業リーダーは目先の利益で社員を動かすのではなく、長期的な視野で社員の精神を「七つの徳」へ近づける方法を模索しているのだ。また若い社員が陥りやすい五月病や「うつ病」にも言及しストレスを溜めない方法を具体的に語っ

ている。そしてビジネスマンの品格にも触れていて、企業のトップは社会的な責任を意識し「ソシアル・カンパニー」を目指し、社員の幸福を実現する努力をすることが必要であると述べている。社員はビジネスマンの品格を得るためには、仕事の能力を絶えず向上させて、相手の立場に立って考え行動し、「使命感」と「責任感」を持って会社の収益のために戦闘的に働き、自らの幸福を実現して欲しいと語っている。五十嵐さんの企業のリーダー論は、収益を上げる個人の能力だけではない、部下の能力を向上させ、部下や同僚の幸せを考え実行することの出来る能力を意味している。

第三章「ビジネスマンの忙中閑紀行」は、十五編の紀行文から成り立っている。この章の中心テーマは二〇〇六年から始まる桜巡りの紀行文である。二〇〇六年は東北の「北上、角館、弘前、十和田湖、奥入瀬」、二〇〇七年は「弘前、松前、五稜郭公園」、二〇〇八年は「鶴岡八幡宮、大井町など都内の桜」、二〇〇九年は「長野県伊那市高遠町の高遠城」、二〇一〇年は故郷の「会津鶴ヶ城址」である。五十嵐さんはその年の桜に出合うことの感動を語りながら、その場所の歴史を物語っていく。また中国の西安、ヴェネツィア・フィレンツェ・ローマ、韓国の高速鉄道などの紀行文は、世界の多様な場所に行っても同じようにその地で触れ合った事物の紹介と同時に歴史を遡って論じてくれている。

五十嵐さんはビジネスマンとしても大きな仕事をし続けてきたが、このエッセイ集を書くことによって、社外の多くの若きビジネスマンはもちろんのこと、異なる分野の中堅社員やリーダーたちにも、ビジネスマンの余白の時間をどう生きるかという課題に多くの示唆を与えてくれるだろう。仕事以外の様々な文化、芸術、歴史、自然などの様々な価値に触れ、自分を絶えずリフレッシュさせることが、自分の仕事にもまたより高いレベルで取り組めることを実践的に語ってくれている。世界に通用するビジネスマンや経営者を育てていくために、「ビジネスマンの余白」から新たな時間を創出する力を学ぶことができるだろう。

五十嵐幸雄　備忘録集Ⅲ『ビジネスマンの余白』栞解説文

鈴木比佐雄

コールサック社

2010